

## 編集後記

今回お届けするのは e-Magazine 第 2 号です。名称を Newsletter から e-Magazine に変更して、第 1 回を発行したのは今年の 6 月でしたので、早くも 3 か月がたちました。このわずかな間に、ロンドン・オリンピックを初め、世界で、そして地域で、政治的にも社会的にも政治的にも、実に様々なことが起きました、否いまま起きています。それらの出来事はいずれもグローバル化した世界では一瞬にして世界中に伝わり、あたかも国内で起きているのではないかと思うほど身近になりました。特に経済面では、アメリカやヨーロッパを初め世界経済には依然として暗雲が立ち込めたままですし、欧米経済と日本経済やアジア経済も一蓮托生の状況が続いております。

こうした状況を見ていると、残念ながら、人間の知恵はあまり進んでいないように感じます。いつになったら世界経済に明るい見通しを持てるようになるのでしょうか。

さて、今回も盛りだくさんの論考を含む e-Magazine 第 2 号を発行することができました。巻頭言には当研究所副代表の井口廣氏が石油業界から見た日本経済の現状について、面白い考察を加えております。まさに石油業界は文字通り世界の経済動向や産業の動きに敏感に反応し、左右されていることがわかります。いまや石油業界は激動の時を迎えているようで、深く考えさせられました。巻頭言であるため、詳細な分析は無理ですが、もっともっと詳しく知りたいという感情に駆られます。

2 番目は梁雲祥氏（中国・北京大学国際関係学院の教授）による中国政治の現状分析です。梁雲祥氏の専門は日本政治の研究です。近く政権交代する中国の政権、あるいは中国の政治はどうなるのだろうか、と内外の多くの人々が関心を持っていることと思います。また中国は内外で多くの問題に直面しております。こうした問題を簡潔に論じた論文であり、時宜を得たものです。梁氏はこの難しい問題にかなり思い切って分析を加えております。大変興味ある論文であり、多くの皆さんにとって有意義ではないかと思えます。

3 番目は溝辺哲男氏の「ブラジルの農業開発と日系企業の動向」です。溝辺氏は発展途上国の開発計画の策定方法に関する実証研究が専門ですが、主としてブラジルのセラード地帯や南米南部地域を中心に毎年出かけ、現地調査を行っています。特に近年はブラジルに焦点を当てた研究をしておられ、毎年ブラジルなど南米を訪問して、調査研究をされております。同氏にはニュースレター第 12 号で「ブラジルセラード開発の意義」と題して巻頭言を書いていただいておりますので、すでに読んでいただいた方も少なくないと思えます。セラード地帯は日本がブラジル政府の進めるセラード開発に協力して、1979 年頃から 20 年以上にわたって「不毛の地」から世界有数の穀倉地帯に仕上げたことで知られています。日本は大量の食糧輸入国であるだけに、セラード開発による農業開発の進展は大変意義深いものだ、と述べる、溝辺氏の指摘は大変適切でしょう。またセラード地帯の開発に応じて、発展する日系企業の様子が論じられています。今回の論文は同氏がブラジルを訪問後、ご投稿いただいた最新かつ貴重な論考です。内容をご覧頂けば、十分ご理解いただけると思えます。

4 番目は陳波氏が、北京、東京そして重慶で経験した、高官警護に対する警官態度の相違を通して筆者が感じた日中文化の相違を考察した文章です。これには中国の歴史を念頭に置いて論じており、これまた特に多くの日本の読者には大変興味あるものと思います。やはり中国は西洋文明をあまり受容する気がないのでしょうか。そうだとすれば、中国の近代化は難しいといわざるをえません。つまり、工業化はしても、民主化は無理ということになるのでしょうか。今後の中国の政治を考えるうえで、貴重な視点を提供してくれているのではないかと思います。

5 番目は長谷川氏の「韓国に再び金融経済危機は起きるか」の2回目です。今回もまだ金融経済危機が起きるか否かの具体的な分析には至っておりません。しかし、次回には韓国が1998年、2008年に続いて、再度、否再再度、金融経済危機に陥るのではないかと、このところ「ネット上で繰り返されている」かまびすしい声が正しいかどうかを論じる段階に到達することでしょう。なにしろ、この点を分析することは大きな問題であるだけに、簡単に結論を出すことができるものではないといったところでしょう。(文責 KN)